KAWADE PAPER BACKS

庄野潤三

旅人の喜び

河出書房新社

長瀬小詩

水人の春秋

Kawade Paperbacks 28

旅人の喜び

装幀者　原　弘（NDC）

昭和38年2月20日　初版印刷
昭和38年2月25日　初版発行

定価　230円

著者　庄野潤三
発行者　河出孝雄
印刷者　小泉輝章

発行所　東京都千代田区神田小川町3の8　株式会社　河出書房新社
電話　東京(291)3721～7
振替口座　東京　10802

© 1963

印刷・小泉印刷株式会社　　落丁本・乱丁本はお取り替えします。

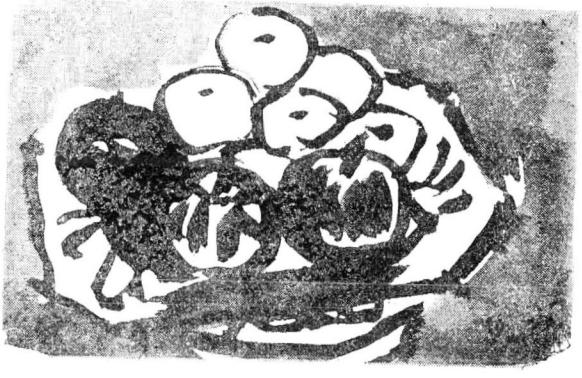
目次

旅人の喜び　五
ニューイングランドびいき　一七三
三つの葉　三三五
あとがき　三五七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

旅人の喜び

旅人の喜び



一

海の上に、蟹が一匹、白いお腹を上に向けて泳いでいる。

それは水面からほんの少し下のところを泳いでいる。

まるで動いていないように見えるが、小さな脚を一生懸命に動かしているのだった。

いったい、どういうつもりなのだろう！

海の上の白い蟹。不思議そうにボートの上から覗きこんでいる自分。水泳帽をかぶって、水着を着ている。

結婚して、五つになる女の子がいる矢追貞子の心に、何かの拍子にこの情景が浮び上ることがある。

蟹を見ているのは女学校の五年の時の自分で、友達と四人で海水浴に行った時のことだ。浮き身しか出来なかった彼女は、友達がみな海に入って泳いでいる時に、ボートの上に一人だけ残っていたのだ。

最初彼女はそれが生きている蟹だということに気がつかなかった。何か白いものが漂っているように思っただけだった。

「いいものがあるから、来てごらん」

そう云って近くにいた友達を呼ぶと、友達はボートのそばまで来て、

「なに？　これ」

と云うなり、無造作につかもうとして叫び声を立てた。

蟹の鋏で指をはさまれてしまったのだ。貞子もびっくりした。

逆さまになって泳いでいる蟹に見とれていた彼女は、蟹に鋏があるということをすっかり忘れてしまっていたのだ。

そんないたずらをするつもりで友達を呼んだわけではなかったか、友達の指に食いついた鋏は、蟹が何処かへ振り飛ばされた後でも、まだ指から離れずに残っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

白いカラーと臙脂色のネクタイ。袖口にもネクタイと同じ色の線が一本入っている。

女学校へ上る前の年の夏に支那事変が始まったので、貞子はこの制服を戦時中の女学生として着るようになったわけだが、その割には楽しみの多い学校生活を送ることが出来た。

町内の出征軍人の見送りや神社参拝、英霊の出迎え、それから防空訓練などが彼女の生活にとけ込んでしまい、そのような賑やかに活気づいた空気の中で大きくなった。

もっとも、もう一年遅く生れていたら、そうは行かなかった。例えば修学旅行にしても、貞子の学年は五年の時、東京へ行けたのだが、次の学年が五年になった時はもう何処へも行けないようになっていた。

そういうことを考えると、貞子たちがいくらか不自由になったとはいってもますます心残りの無い学校生活を送ることが出来たのは、幸運であったといえる。

すれすれの、際どいところでずーっと大きくなったようなものである。

ズボンを穿いて学校へ行くようになったのは、女学校を卒業して、そこの高等科に進んでからであった。だから女学校の五年間は、スカートで通すことが出来たわけだ。

こういうことは、戦争というものが過ぎ去った昔のことになった今では、その頃のことを知らない人には何だか滑稽なことに聞えるかも知れない。

だが、貞子たちにとっては、スカートを穿いて学校へ行けるのとそうでないのとでは、大変な違いであったのだ。

彼女の学校では、運動会の時に分列行進が行われるようになった。国民服を着てゲートルを巻いた老校長の前で、級長は勇ましく「頭右！」の号令をかけ、彼女たちは白い鉢巻をしめブルマースの足なみを揃えて行進したのであった。

もっとも、こういう派手なことは他の学校にさきがけてやってのける代りに、生徒のこしらえた人形を戦地へ送ったりするのも一番早かった。学徒動員が始まってどの学校でも授業を止めて工場へ行くようになった時に、一番最後まで行かずに残っていたのも彼女の学校であった。

「勉強しとりゃあ良えんじゃ」

対外的な思惑を気にする者があると校長はそう云った。彼は女学生が何も汚ない恰好をして工場なんかに行く必要は無い。女の子はきれいにして居る方がいいという考えを持っていたのである。

しまいには生徒の方から、他の学校の生徒に道で会うとつらい気持がするからあたし達も工場へ行かせてほしいと申し出たので、やっと行くことになった。

貞子が高等科二年の二学期を迎えた時、終戦の前の年のことである。

彼女と一緒に入学した者の中で、この時まで残っていたのは三十人ばかりであった。他の者は女学校を終るとそれでもう高等科へは来なかったし、高等科へ進んだ者の中でも一年を終るまでに途中で結婚して止めてしまう者がいた。

三十人という数は、まとまるのに丁度いい人数であった。それに気心の合った連中ばかりが残っていたので、貞子のクラスはよく団結していた。

彼女たちが行ったのは魚雷艇の部分品をこしらえている、あまり大きくない工場で、どぶ川の横にあった。

他に中学校の生徒も出ていたが、彼等は工場の中に入っていて、貞子らは製図室を一つ提供されてそこで青写真をつくる仕事をやった。そのために工場へ来ているとはいっても、教室を移したようなもので、相変らず彼女たちは屈託のない毎日を送った。

空襲警報が出ると、工場の裏の防空壕へ入ることになっていたが、或る時などは海軍少尉に任官した兄に面会するため東京まで出かけて行った友達がゴムの袋に入った羊羹をお土産に貰って来て、それを防空壕の中で食べたりしたこともある。

また、警報で慌てて部屋を飛び出して、青写真を裏向けにしておくのを忘れ、今度帰って

来てみると、全部消えてしまっていて、監督の人にひどく叱られたこともあった。

貞子たちは制服の胸のところに、学校名と名前・年齢・住所を書いた布を縫いつけていた。

それは何時どんな場所で空襲に会って死ぬことがあっても、身もとが分るためのものであった。

ところが、貞子とあと三、四人の生徒は、その名札をつけたまま、工場の帰りに宝塚へ行った。

その時分、大劇場の方は既に閉鎖されていたが、小劇場ではまだ「みにくいアヒルの子」や「かぐや姫」なんかを上演していた。彼女たちは女学校の五年の時から毎月欠かさず見に行っていたのである。それも同じものを多い時には四回も五回も見た。

初日は必ず見に行くことにしていた。その日だけダンス選科の生徒がみな真白のトウ・シューズをはいて出る。それを見るのが彼女たちの楽しみであったのだ。

クラスには行きたくても親が許してくれない友達もいたのだが、貞子とあと三、四人だけは戦争がますます悪い方に傾いて行くその頃に飽くまでも宝塚通いを止めなかったのである。

貞子の家は、新聞社に出ている父が昔から子供には好きなことをやらせておけという主義で、兄妹五人みなめいめいのびのびと育っていた。

貞子はちょうど真ん中で、兄は陸軍中尉で支那に居り、二つ年上の姉は女学校を出た年の秋に結婚して東京へ行ってしまった。

弟は中学校から神戸の航空機工場へ動員で行って居り、妹はまだ小学校の六年生である。家に居るのは、貞子と妹と二人きりであったから、彼女の宝塚通いに不心得を唱えるものもいないわけであった。

ところで貞子たちの卒業式の日が近づいて来ると、青写真を前にして彼女たちはこんなことを申し合せた。

「卒業式には高二の者は全部、焦茶のリボンをつけよう」と。

戦局が急迫して来たその頃では、彼女たちに残された唯一のお洒落は、リボンであった。無論そのリボンでさえ、ふだん髪につけて外を歩くことは出来なかった。それで卒業式の時だけ、みんなで髪につけようというのである。

女学校にいた五年間は、貞子は一日も欠かさずにスカートの寝押しをして来たのだが、面倒であったスカートの寝押しも、それをやれない今となると恋しいものであった。

貞子はその代りにスキーズボンを毎晩寝押しして、スキー靴を穿き、どぶ川のほとりの工場へと出かけていたのだ。

焦茶のリボン。これに彼女たちが女学生としての最後のお洒落を託そうとしたのは、焦茶という色が彼女たちの間でその頃一番好まれていた色であったからだ。

しかし、前からあるようないいリボンはもう何処の店にも売っていなくて、あるのは人絹の、ふわふわした安物くさいリボンばかりで、それもチェックのものなどはあっても、焦茶のものは殆ど見当らないのであった。

大抵の者は一つくらい持っていたが、長く髪につけていたものは油がついて汚れているので、新しいリボンがほしいのだった。

工場の帰りにちょくちょくみんなで店を探したが見つからなかった。

卒業式まであと十日という日になって、貞子と一緒に同じ方向へ帰る四人が、偶然、いつもその前を通って帰る電車通りの小さな洋品店で、探していた焦茶のリボンを見つけた。

それはタフタの、しっかりした、いいリボンであった。

大よろこびで彼女たちは、その場にいないもう一人の友達の分まで買って帰った。その店にはもうそれだけしか無かったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c